

論文執筆の手引き

青山学院大学経済学会

はじめに

論文というものは感想文やエッセイと異なり、広く研究活動にたずさわる読者をターゲットとした公共性をもった文章表現であり、他人の著作物を無断コピーすることは許されない。論文を書こうと考える学生はまずこのことを認識してほしい。また、感想文やエッセイと異なり、論文の目的は、読者を主に論理と実証によって説得することである。したがって、読者の感性にアピールするための文学的なセンスはさほど重要ではない一方、集めた情報を主張したい結論に沿って組み立てる論理力と、客観的な情報に基づく実証的説得力が重要となる。また、論文の目標とするところは、独創性をもって当該研究分野に少しでも新しい知見を貢献することであり、課題図書理解度の示せば足りる通常授業でのレポート作業を超えた、知的創造活動である。当然それなりの時間と労力を要求されるが、論文作成の経験は、皆さんが将来どんな職業生活を送るにしても、必ず有用なスキルにつながるので、積極的にチャレンジして欲しい。

I. 論文の体裁

① Word を用いて作成すること。

[3・4年生]

A4用紙横書き 14～34 ページ（目次、本文、参考文献、図表を含む）

- ・ 1 ページ 40 字×30 行とすること。
- ・ 英数字は半角文字を使用すること。

[1・2年生]

A4用紙横書き 10～17 ページ（目次、本文、参考文献、図表を含む）

- ・ 1 ページ 40 字×30 行とすること。
- ・ 英数字は半角文字を使用すること。

② 提出に際しては、1,200 字以内の要旨を添付すること。

③ 投稿論文は未発表のものに限る。

II. 論文の構成

つぎの順序で書くこと。

- ① 論題
- ② 目次
- ③ 本文
- ④ 参考文献

（但し、注についてはVI. 注を見よ。）

III. 表紙

1 ページ分を使用すること。

論題のみを書くこと。

※氏名、学籍番号、ゼミ名は書かないこと。

（論題）

論題は、論文の内容を的確に、しかも簡潔に示すものであること。必要ならば、論

題に副題をつけてもよい。その場合には、副題を棒線ではさむ。

<例>

所得税と貯蓄への二重課税

——とくにイタリア財政理論に関連して——

IV. 本文

序（章）には、論文の目的、範囲、意義、手順（論文の構成）を述べる。

最後の章では、論文において研究された事項の摘要を記すとともに、研究の結果発見ないしは確認された主要事項、残された問題をまとめて、結論の章とする。

文体はすべて「である」調で統一する。体言止めの文章は使わない。文中で自分に言及するときは「筆者」（共同研究の場合は「筆者ら」）で統一する。

V. 引用

論文中で、他人の説を引用したり、執筆者が未知の事実についての記述等を借りる場合には、その旨明記しなければならない。他人の説を無断で借りて、あたかも自らの創意であるかのごとく装う態度は厳に慎まねばならない。また、インターネット上の、不特定多数によって修正可能なサイトの記述を引用することは禁止とする。以下、引用の仕方を説明する。

① 文献の記述をそのまま引用する場合には、原文を忠実に写し、その引用文を一重のかぎカッコ「 」でくくる。そして、その文献を「注」で明示する。原典にかぎカッコが用いられている場合、そのかぎカッコは、引用を示すかぎカッコと区別するため、二重のかぎカッコ『 』に変更する。（これらの手続きは文献のタイトルを引用する場合にも適用される。）

② 文献の記述を要約して引用する場合は、要約引用の範囲が分かるように記し、出典を明示する。

③ 引用文に、引用部分の前後を知らないと理解しにくい語句がある場合は、その引用語句に続けて[]でかこって、その語句を示し、引用者が書き加えた旨を明示する。

<例>

「その国 [ポーランド] の農民は」

④ 引用文中の特定の語句を特に強調したいときは、傍点を付すとよい。但し、その傍点は執筆者が加えたものであるから、（傍点引用者）として責任を明らかにする。

<例>

.....

「その国の農民は」（傍点引用者）

VI. 注

注の付け方には、脚注 (footnote)、尾注 (endnote)、章末注など、いろいろなパターンがあるが、どれかに統一すること。具体的な例は、過去の本学部学生懸賞論文集を参考にする。

VII. 引用文献・参考文献の表記

(和書) 単行本、雑誌名、新聞名には二重のかぎカッコ『 』、雑誌論文、単行本所収論文には一重のかぎカッコ「 」を用いる。

< 単行本：例 >

日向寺純雄『イタリア財政学の発展と構造』(青山学院大学経済研究所研究叢書 2) 税務経理協会、1987、22 ページ。

< 単行本所収論文：例 >

石畑良太郎「現代社会政策の考え方——展開状況と分析視角など——」(石畑良太郎・佐野稔編『現代の社会政策』〔第3版〕、有斐閣、1996年) 14 ページ。

< 雑誌論文：例 >

原豊「産業組織と産業政策——中国塩産業のケース——」、『青山経済論集』、第47巻第1号、1995年6月、24-25 ページ。

< 新聞：例 >

『日本経済新聞』1995年6月2日、朝刊。

(洋書) 洋書の書名および雑誌名にはイタリックもしくは下線(アンダーライン)を引く。論文は“ ”でくくる。

< 例 >

Hywell G. Jones, 1975 An Introduction to Modern Theories of Economic Growth, Thomas Nelson (松下勝弘訳『現代経済成長理論』マグローヒル好学社、昭和55年)

J. M. Keynes, 1929 “The German Transfer Problem”, Economic Journal, Vol.39, pp.1-7.

VIII. (参考) 論文の書き方についての参考文献

論文の作成に当たっては、以下の文献などを参考にするとよい。

- ・小笠原喜康 2002 『大学生のためのレポート・論文術』講談社現代新書 1603
- ・河野哲也 2005 『レポート・論文の書き方入門 第3版』慶應義塾大学出版会
- ・木村福成・小浜裕久 1998[増補版] 『経済論文の作法:勉強の仕方・レポートの書き方』日本評論社
- ・戸田山和久 2012 『新版 論文の教室 レポートから卒論まで』NHK ブックス
- ・『経済セミナー』2020年8・9月号 通巻 715号 経済論文の書き方[実証編]